

### ご自分で部屋の音響をチェックしませんか？(費用は3千円！)

この方法はいたって簡単ですが、誰でも何度でも確実に部屋の音響特性を把握することが可能です。

ただし、CDプレーヤーを含む普通のオーディオセットが使用出来ること、これが唯一の条件です。精密騒音計は不要です。

マイクも要りません。マイクの代わりにご自分の耳を使用していただきます。

3千円の投資が必要ですが、それは(社)日本オーディオ協会の「AUDIO TEST CD-1」を購入していただくための費用です。

方法といっても、それはこのCDの「Spot 20Hz-20kHz 0dB L+R」を順番に再生していただき、部屋のあちこちでその周波数の音を聴いていただくだけのことです。

この作業により、部屋の周波数帯別定在波の発生状況が詳細に確認出来ます。

高い周波数帯になると（波長が数センチなので）ちょっと頭を動かしただけで、音が強くなったり弱くなったりする現象を体験していただけるはずです。

なお、周波数が低い場合、扉などが共振することがあります。この場合は勿論共振対策が必要ですが、これは定在波というよりむしろ振動の固体伝播によるものと考えてよいと思います。

仮に、その部屋がオーディオ・ルームなら、この作業はスピーカーの位置とリスニング・ポジションを決めるために役立ちます。

また、楽器を演奏する部屋でしたら、この作業で得られた情報は楽器の位置決め、さらに演奏を録音する場合でしたら、マイクの位置決めにも役立つことでしょう。

ご参考まで：

500Hzは、A4音を440Hzで調律されたピアノの右隣のB4音に相当します。

1000HzですとB5音になります。詳しくは次頁の「(対応) 一覧表」をご覧ください。

注1) 「信号」の「波長」は音速を340m/secとした場合の値です。

注2) 「対応キー」( )内の周波数はA4=440Hzとした場合の値です。

以上

AUDIO TEST CD-1 のテスト信号と対応キーの一覧表

## 超低域

信号 Hz (波長 cm)	対応キー (周波数 Hz)
25 (1360.0)	G0 (24.9)
<b>31.5 (1079.4)</b>	<b>B0 (31.3)</b>

## 低域

40 (850.0)	D1# (39.8)
50 (680.0)	G1 (49.7)
<b>63 (539.7)</b>	<b>B1 (62.7)</b>
80 (425.0)	D2# (79.6)
100 (340.0)	G2 (99.5)
<b>125 (272.0)</b>	<b>B2 (124.3)</b>

## 中域

160 (212.5)	D3# (159.1)
200 (170.0)	G3 (197.5)
<b>250 (136.0)</b>	<b>B3 (246.9)</b>
315 (107.9)	D4# (311.0)
400 (85.0)	G4 (395.0)
<b>500 (68.0)</b>	<b>B4 (493.7)</b>
630 (54.0)	D5# (626.6)
800 (42.5)	G5 (795.7)
<b>1000 (34.0)</b>	<b>B5 (994.6)</b>

## 高域

1250 (27.2)	D6# (1243.3)
1600 (21.3)	G6 (1591.4)
<b>2000 (17.0)</b>	<b>B6 (1989.2)</b>
2500 (13.6)	D7# (2486.5)
3150 (10.8)	G7 (3150.5)
<b>4000 (8.5)</b>	<b>B7 (3978.4)</b>

## 超高域

5000 (6.8)	D8# (4973.0)
6300 (5.4)	G8 (6266.0)
<b>8000 (4.3)</b>	<b>B8 (7956.8)</b>
10000 (3.4)	D9# (9946.0)
12500 (2.7)	G9 (12432.5)
<b>16000 (2.1)</b>	<b>B9 (15913.6)</b>